

# つれづれ 彩時記



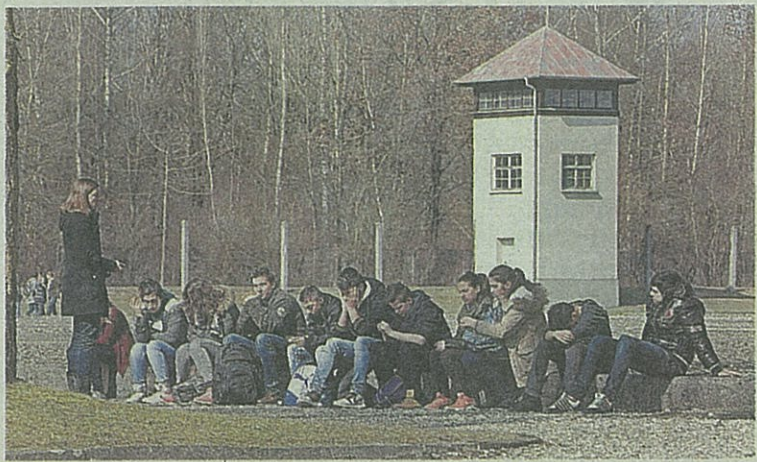
藤原辰史

昨年、京都大学の全学共通科目でリレー講義「第一次世界大戦と現代世界」の2回分を担当した。担当の講義を終えた直後、工学部の学生が1人やってきて「通り感想を伝えたい」と「一般教養科目に現代史の講義がほとんどない」と不満を漏らした。いや、あるはずではないかと、と幾人かの研究者の顔を思い浮かべながら返答すると、「ないので、このリレー講義に登録しました。高校ではあまり教わらなかったし、こんな時代ですから」。続けて、彼はこう言った。「先生、お願いです。来年、全学向けに現代史の講義をやってくれませんか」。驚いた私は、考えてみるよ、とだけ言って講義室を去った。

シラバスを調べてみたら、日本史や西洋史など、地域や国によって部分的に現代史を扱っていきそうな講義はあるが、現代史を正面から扱う全学向けの講義はない。集団的自衛権の閣議決定がなされる直前であったから、現代史を知らない大学生があまりにも多いことに私も焦りを感じていた。

## ヒトラーの遺言

そんなわけで、今年度前期に「現代史概説——ナチズムを中心に」を開講した。「20世紀の紛争争ってみようか、はいどうぞ」、「地球上の植民地、いつつぎに手が届く。毎回、ノリのよいライブハウスのような空気が流れる。学生たちの目つきも怖いほどに鋭く、私の記憶違いも絶対に逃さないもので、喜んでばかりもいられない。先日の講義で、私はヒトラー



「もし、ヨーロッパの諸国民が、ふたたびこの国際的なカネと金融の陰謀家どもの株券の束としてしかみなされなくなるとすれば、この殺し合いを引き起こした張本人であるあの民族はまたもや責任を問われることになるだろう。その民族とはすなわち、ユダヤ民族のことだ！」

「私や他のドイツ人の誰かが1939年あの戦争を欲していたというのは、正しくはない」と冒頭で述べたヒトラーは後世の評価を気にしながら、1939年9月1日に自分で引き起こした戦争の責任から逃れ、

ヒトラーが政権を取った1933年につくられたダッハウ強制収容所跡では、国内の中生たちが「真の歴史」を学ぶため、毎日のようにやってくる。3月、ドイツ・ミュンヘン郊外

## 責任逃れのため 創出される憎悪

「ユダヤ民族」に押し付けられている。汗を流して働くドイツの民衆が「金融の陰謀家」たる「ユダヤ人」に對置されていると解説した。

学生に感想を聞くと、1人が「ヒトラーのユダヤ人憎悪がここまで強烈だとは知らなかったが、この憎悪は創出されてきたような感じがする」と話してくれた。私も、遺言書のユダヤ人憎悪に作為のようなものを感じずにはいられない。自己の支持率を高めるために民族憎悪という分かりやすい俗情に訴える、すると国民も憎悪がかき立てられる、そのうちに、仕掛け人もまたその虜になつていく。

こんな輪転機のような憎悪製造マシンは、最近の日本列島でも量産されている。もちろん創出された憎悪は、戦争に巻き込まれたときの責任逃れに利用されやすい。すさまじい数の若者たちの生命を消しておきながら、あれはあの人たちのせいだったからばくのせいじゃないよと言って、勝手にあの世に旅立つような五十六歳の男の卑怯。安保関連法案の審議で、戦地の、精神の錯乱と死屍の臭気と殺人の悔恨を語らない国会のおじさんたちの顔に、私はこの男の卑怯が透けて見えてならない。

座「毛沢東の詩を読む」 30日午後 京都市下京区、京都三井ビル4階、四條センター(075・231・8004)。講師 田富夫・佛教大名誉教授。千円。

命館土曜講座 ゲーム学への招待 日午後2時、京都市北区等持院北町の立命館大末川記念会館。講師は渡辺修司・立命館大准教授。無料。立命館大衣笠総合研究機構=075・465・8236。

●日文研フォーラム おんなもの 日本の伝統芸能における「女性」の登場とその表象をめぐる 7月7日午後6時半、京都市中京区のハートピア京都。発表者はブルガリア国立演劇映画芸術アカデミー客員講師のガリア・トドロバ・ペトコバ・ガブロフスカさん。無料。申し込み不要。国際日本文化研究センター研究協力課=075・335・2078。

◇月1回掲載します。